



SANZUI vol.08_2015 autumn



特集

80's Spirit



SANZUI vol.08_2015 autumn

CONTENTS

「SANZUI」は、実演芸術のあらゆる魅力を伝えます。
実演芸術に触れた感動が水の流れるように
人々の身体の中に深く浸透し、潤し、育みますように。
そんな思いを込めました。
<http://www.cpra.jp/sanzui/>
(バックナンバーの閲覧・プレゼントの応募はこちらから)

公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権隣接権センター(芸団協CPRA)

02-13 特集 80's Spirit

野村 萬×八千草 薫

加藤 武

ペギー葉山

四代目 三遊亭金馬

一柳 慧

14-15 美匠熟考

能管

映画「男はつらいよ」寅さんの帽子

16-17 裏舞台という名の表舞台
「特効」
有限会社スパーク

18 実演家ゴヨータシ

19 ひとつください / 栗原 類

20 若き実演家の未来 / 藤井ゆきよ

21 SANZUI ぼっしょん
G.R.E.S. 仲見世バルバロス

22 エッセイ
東海林のり子

24-29 ロングインタビュー

渡辺貞夫



特集

80's Spirit

特集 *80's Spirit*

80代だから、挑戦する。

歳は、取るものではなく、重ねるもの。
舞台上やテレビの中の80代を観ていると、そう思えてくる。
若い頃にその道に入り、夢や希望を追い続け、時には失敗や挫折もあつたろう。
それでも挑戦し続けることで昇華した、人生の高み、深み、輝き。
だから、80代の「今」というピークがあるのだと思う。
40代、50代なんて、まだまだ子ども。
そう言われているような気がする、80代の挑戦者たちである。

八千草薫



野村萬



芸に遊ぶ能楽師と臈長ける女優の挑戦。

——八千草さんは5月に公開された「ゆずり葉の頃」で主演、萬さんは萬狂言の舞台に出演されています。お二人に共通するのは、今なお現場の第一線をリードし続けていること。まずはこの芸の道に入られた頃のお話をお伺いします。

野村 伝統芸能の家に生まれ、気づいたらこの道に進んでいました。父が師でありましたが、スパルタ稽古でした。子供の頃の想いや体験は一番体に残っています。義務教育の時期は芸の修業の時期と重なるため、父からは勉強は中学（旧制）でやめるように言われましたが、東京音楽学校（現 東京芸大）の邦楽科に入学しました。大学で能楽にとどまらず、様々なことを学び経験したことが、自分のとても大切な財産となっています。

——萬さんは親が師匠でもあり辛い思い出もあるけど、それが今の骨格になっているのですね。八千草さんは大混乱の終戦を迎え、直後に宝塚という全く違った環境に身を置かれている。真っ暗な焼け野原の中と、宝塚の舞台の特別な世界。

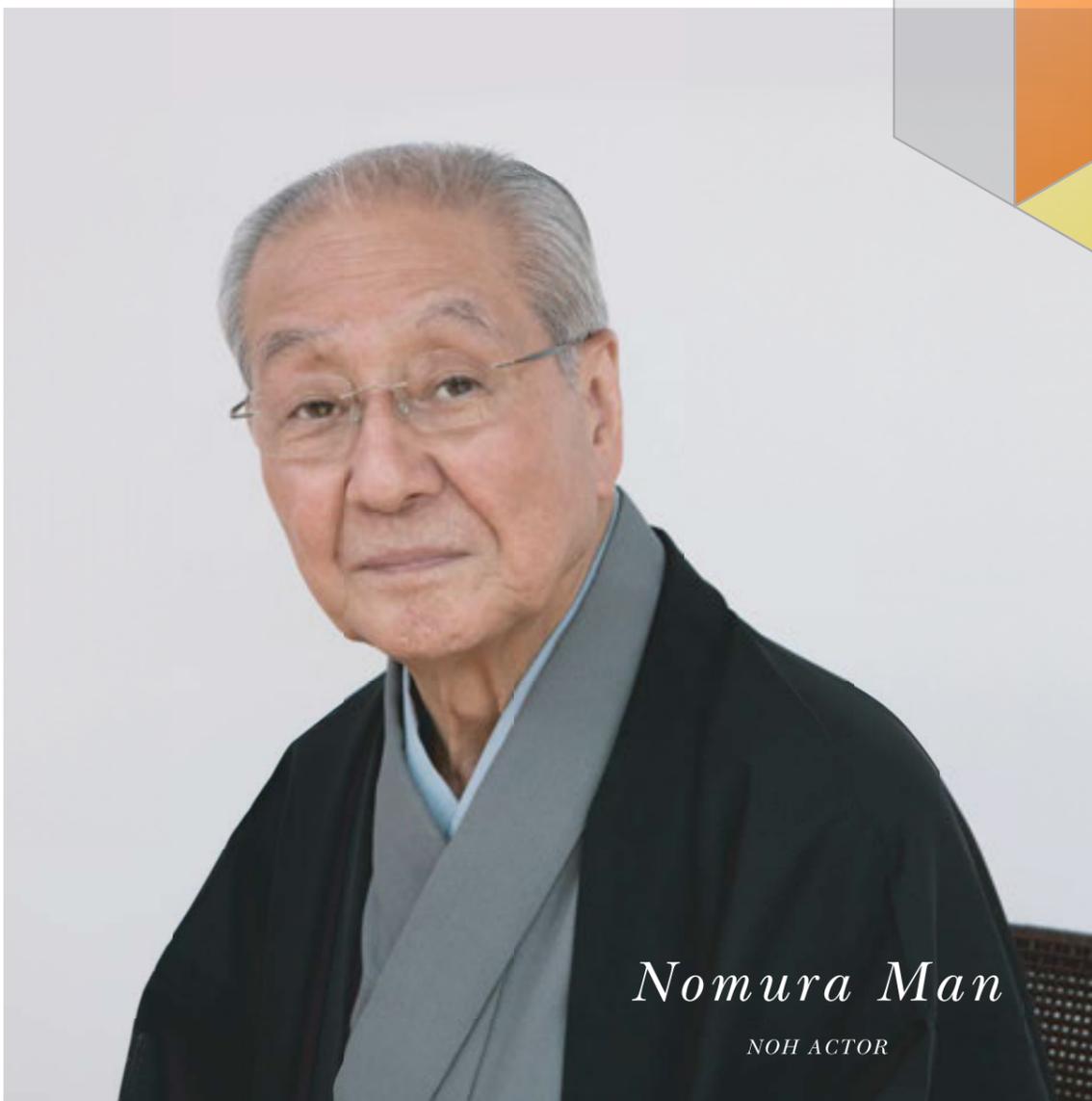
八千草 宝塚は夢そのものでした。で

も実際に入ったら全然違いますね。厳しい稽古の現実がありました。音楽、衣装、吸収しなきゃいけないことがいっぱい。当時は学科がありませんでしたが、浄瑠璃や三味線を習ったり。それらは今全部プラスになっています。

——芸を長く続けてこられた今だからこそ言える、昨今の舞台や映画についての想いを伺います。

野村 様々なジャンルで年寄りももっと活躍できる場、存在感を示すことのできる舞台があって欲しいですね。伝統芸能は、幅広い世代が同じ舞台に位置することができる。また、古語を駆使しますが、大家族であれば、日常生活の中でも言葉に対する振幅度を感じることができて、自然と身につけていきます。能舞台を美しい日本語に出会える場にしたいと常に願っています。

八千草 昔は家族のドラマが多かったですね。「岸辺のアルバム」もそう。すると違う世代間の会話が多くなります。でも今は登場人物が若い人だけで、ちょっとつまらない気がします。その世代の価値観だけで話が進みますから。いろんな世代の人で物語がつけられて



Nomura Man

NOH ACTOR



Yachigusa Kaoru

ACTRESS

いくと、若い人にもいろんな発見ができると思います。言葉の話でいうと、昔自分のアクセントを気にして練習したことがあります。でも今きちんとしたアクセントのかた少ないですよ。言葉は時代で変わるものですが、短くするのは好きではありません。

——舞台なら千秋楽、映画ならクランクアップ、試写会の時、この仕事やって良かったと思うことを教えてください。

八千草 先日「宮本武蔵」を久しぶりに観て、自分の演技がなくなりました。当時どうしていいのかわかなくてなかったんですね。すごくひたむきで、ただ武蔵が好き。それだけなんです。でも観ているうちにそれでよかったんだと思いました。つたないほど単純に人を好きになる、自分を肯定できたのは、嬉しい発見でした。クランクアップからものすごく時間が経ってしまいましたが。

野村 「芸に遊ぶ」という言葉がありますが、孫との稽古や一緒にの舞台に出たりすると、子供の心と一体になれば動きません。そんな時、「芸に遊ぶ」という境地の一端を感じる事があります。若い時よりは良い意味で軽

く、気張らずに舞台に立てるようになりました。舞台に存した時に、大勢の観客が温かく見守ってくださる。役者にとって本当に晴れがましいことです。

八千草 私も舞台に出てる時が一番気持ちが良い。気持ちが大きくなります。——臈長ける。最後に萬さんは八千草さんを通してそうおっしゃいました。それは男性に対してはつかわない言葉。洗練された美しさと気品があることをいいます。その萬さん、芸に遊ぶ境地へはまだ至らないと、挑戦の日々が続きます。

聞き手 葛西聖司（アナウンサー）

PROFILE 野村 萬（のむら・まん）1930年東京生まれ。能楽師（狂言和泉流）。4歳で初舞台を踏む。97年重要無形文化財個人指定（人間国宝）の名譽を受ける。2001年日本藝術院会員、08年文化功労者となる。早くから数々の大曲を演じる一方、新作狂言や新劇、TVドラマへの出演・演出などにも取り組む。現在も多くの舞台で活躍する傍ら、後進の育成にも力を注ぐ。（公社）日本芸能実演家団体協議会会長、（公社）能楽協会理事長。

八千草 薫（やちぐさ・かおる）1931年大阪市生まれ。俳優。47年宝塚歌劇団入団、娘役として一時代を風靡。退団後、「宝塚夫人」で映画デビュー。主な出演映画に「蝶々夫人」「乱菊物語」「ディア・ドクター」「ゆずり葉の頃」などがある。2004年日本アカデミー賞優秀助演女優賞を受賞。他に舞台「二十四の瞳」、テレビドラマ「岸辺のアルバム」「阿修羅のごとく」をはじめとする数多くの作品に出演。

葛西聖司（かさい・せいじ）東京都生まれ。司会者、古典芸能解説者。NHKエグゼクティブアナウンサーとしてテレビ、ラジオの番組を担当。現在その経験を活かして歌舞伎など古典芸能の解説や講演を行う。また大学やカルチャーセンターなどで伝統文化の講義を行い、執筆活動も。著書に『文楽のツボ』『名セリフの力』『ことばの切っ先』などがある。

加藤武



Kato Takeshi

ACTOR

地のキャンバスを大事に、 いつも真っ白にしておくこと。

2014年4月、文学座公演『夏の盛りの蝉のように』で江戸の絵師、葛飾北斎を演じた。艶やかな声色、鋭い眼光、いぶし銀の所作。万端に漂うエネルギーな演技で、第49回紀伊國屋演劇賞個人賞、第22回読売演劇大賞芸術栄誉賞および優秀男優賞を受賞した。凄いですね、と言い掛けた途端、返ってきた言葉が、「まだダメです。これでいいなんて思っていません」。1952年の初舞台から63年の俳優人生。78年の歴史を刻む新劇の老舗劇団、文学座の現・代表だ。

「現役でいることは、年齢なりに体力を維持していかなければならないということ。舞台上で年が出てはいけない。あの人、お年寄りねえと思われたらおしまい。普段の体作りが大事です」

2005年から始めている朗読独演会を今年も7月に日本橋亭で行った。吉川英治作『新平家物語』と8代目市川中車の『大島綺譚』からの一節。少年時代に夢中で聞いていたNHKラジオ『宮本武蔵』の朗読を『加藤武の語りの世界』を通して再現している。「小学生の時、

徳川夢声さんとまだ八百蔵と名乗っていた8代目市川中車、2人の語る武蔵にワクワクしました。戦争中だから、ブーと警戒警報が鳴ると中止になっちゃう(笑)」

9月には、岐阜県可児市の文化創造センターで初日をあけた後、東京も含め全国巡演される舞台『すててこてこてこ』に三遊亭円朝役で主演する。

「名人円朝と弟子の円遊とが落語家として新旧対決するディスカッション・ドラマです。台詞の量が凄い。今は、時間をかけて丹念に覚えるしかない。若い時は、役を演じるのにまったくの別人格になりきることに憧れていました。でも、体がキャンバスなんだから、この地をいつも真っ白にして、どんな色でも描けるようにしておくことが大事なのです。年をとると舞台を踏むチャンスが少なくなってきます。恐いことです。でもね、こうやって、元気だ！ってことをアピールしていれば、やがてチャンスは巡ってくるでしょう。これからも舞台や朗読も続けてゆくつもりです」

取材・文 石井啓夫（演劇コラムニスト）

加藤武さんが7月31日に急逝され、ただただ驚いています。6月に行った本取材では、芝居について、また秋の公演に向けて語っていただきましたので、ご本人の確認稿を掲載いたします。謹んで哀悼の意を表します。（編集部）



2014年『夏の盛りの蝉のように』写真：鶴田照夫



PROFILE 1929年、東京・築地生まれ。早大英文科卒。中学の英語教師を経て文学座へ。子供の頃から歌舞伎、文楽、落語などに馴染む。52年初舞台。以降、舞台、映画、テレビで大きな声と濃厚な存在感で活躍。黒澤映画や『金田一耕助シリーズ』の警部役などで人気を博した。文学座代表。2015年7月31日没。

文・安倍寧
(音楽評論家)

ペギー葉山



Peggy Hayama
SINGER

原点は米軍クラブとバンド歌手だった。

ペギー葉山は、2012年、歌手生活60周年を祝って全国各地でコンサートを開いた。その後も元気溍刺、歌い続けているのは嬉しい限りだが、私は、そもそもこの数え方そのものにちょっぴり異論を抱いている。

なるほど彼女のレコード・デビューは、1952年、「ドミノ／火の接吻」(もちろんSP盤)だったから、そういう勘定も成り立ち得る。しかしそれ以前、すでにペギーは新進ジャズ、ポピュラー歌手として相当な売れっ子だったのだ。そのプロローグは無視できない。

彼女はよく「私の原点は米軍クラブとバンド歌手よ」という言葉を口にする。敗戦後、アメリカ軍に接収された新橋第一ホテル内の将校クラブで、一流ジャズ・オーケストラ、渡辺弘とスター・ダスターズの専属歌手として歌い始めたからだ。日本人向けのジャズ・コンサートでも当時のヒット曲「アゲイン」や「トゥ・ヤング」を歌い、人気が高かった。

バンド専属歌手はそのバンドの一員だから、マイクの前に立たないときでも、前列の端のほうにちょこんとすわって待機している。想像するに歌っていない間も多くのことを学んだのではないか。

それ以来の長い長いキャリアにもかかわらず、ペギーの声は衰えを知らない。しかも若

い頃より深みを増している。深みということ言うなら、むしろ声以上に歌唱力かもしれない。

去年春、名ピアニスト前田憲男の傘寿記念コンサートがあり、そのときペギーは「Can't Help Lovin' Dat Man(あの人が好き)」(ミュージカル『ショー・ボート』より)を歌ったが、これが絶品だった。これぞ究極のラヴ・ソング!私はその情感に圧倒された。

ジャズのスタンダード曲からシャンソン、カンツォーネまで、「南国土佐を後にして」から「ドレミの歌」まで、ペギー葉山の守備範囲は限りなく広い。そのなかで私がひとときわ愛着を持つのは、平岡精二作詞・作曲の「爪」[学生時代]である。ジャズ・ヴァイブラフォン奏者平岡と彼女の都会的センスがびたり一致したからこそ、こういうお洒落な持ち歌が生まれたのだろう。

ペギーと私は昭和一桁の同年生まれである。会えば苦しかった戦中・戦後体験の話になる。彼女はきっぱりと言う。

「あの時代を若い人たちに語り継いでいなくてはね」

それは、敗戦、廃墟、ジャズが分かち難く結びついている私たち世代の責務にちがいない。



PROFILE ペギー葉山(ペギー・はやま) 1933年、東京生まれ。高校時代、クラシックを学び、進駐軍放送から流れるポピュラー音楽に魅了され、ポピュラーソングに転向。高校在学中に渡辺弘とスター・ダスターズの専属歌手として、進駐軍のステージで活躍。卒業後、レコード・デビュー。テレビ番組「歌はともだち」の司会、「ひらけ!ポンキッキ」のレギュラーとして出演。『南国土佐を後にして』、『学生時代』、『ドレミの歌』などのヒット曲がある。現在も、テレビ・ラジオ、ステージに第一線で活躍中。

安倍寧(あべ・やすし) 1933年生まれ。音楽評論家、エイベックス・ライヴ・クリエイティブ・シニア・アドバイザー。元劇団四季取締役。55年、大学時代に新聞・雑誌への寄稿を始める。得意とする専門分野は、内外ポピュラー音楽、ミュージカルなど。著書に『音楽界実力派』、『ショウ・ビジネスに恋して』、『喝采がきこえてくる』など多数。1965年以降、毎年ブロードウェイの主要作品を見つけている。

四代目 三遊亭金馬

Sanyutei Kinba
RAKUGO STORYTELLER

芸歴74年、落語の原点に帰る。

この道74年。東西で八百人を超すといわれる現役落語家の中で、最高最長の芸歴を誇る。1941年、爆笑落語『居酒屋』で売れに売れた三代目三遊亭金馬に入門。以来、何千回、いや何万回高座に上がったのか、もう本人もわからなくなった。

「でもね、80代半ばを過ぎた今でも、月に10日は寄席に出てるんです。トリの時は毎日ネタを替えています。あたしのことを好きだっぺお客さんに、同じ噺を聞かせるわけにはいきませんよ」

67年、四代目金馬を襲名したときは、すでにテレビの人気者だった。

「講談の一龍齋貞鳳さん、物まねの先代江戸家猫八さんと競演した『お笑い三人組』（56～66年）が大ヒット。あたしも満腹ホールの竜ちゃん役で売れて、落語の稽古もせずに、全国を飛び回った。名人だった師匠が亡くなり、その3年後に四代目になったのはいいけれど、先代の名前が大きすぎるんです」

名実ともに「金馬」と認められたい——。落語ざんまいの日々が続いた。

「考えてみると、あたしは師匠金馬に稽古をつけてもらったことがほとんどないんです。覚えたネタを聞いてもらうのも一苦勞でした。『師匠、お願いします』『やだ！』『そんなこと言わずに聞いてください！』『おまえの噺

を聞くと下手になる』。粘った末にやっと噺を始めると、『ああ酒がまずくなる。あーへたくそ！』なんて具合ですから」

それでも、少年時代からずっとそばにいた師匠だけに、先代金馬の教えは体で覚えている。

「新旧、時代、世話、何でもできなきゃいけない。噺家なんだから、しゃべって人が喜ばれることは何でもやれ」

師匠の教えをかみしめつつ、八代目桂文楽、六代目三遊亭圓生、五代目柳家小さんら、昭和の名人上手に稽古を願った。『子なさせ地蔵』など、新作落語にも意欲的に取り組んだ。いつの間にか、ネタ帳に書き留めた持ちネタの数が200を超えた。

「ネタが増え、自分なりのやり方も工夫した。先代とはレベルが違うけど、あたしはあたし、四代目金馬の落語をやろうと思えるようになりました。でもね、先代の売り物『居酒屋』だけは、どうやっても師匠の型になっちゃう。体に染みついているんでしょうね」

「噺家生活も長くなりましたから、落語の原点に帰って、前座ばなしの『牛ほめ』や『子ほめ』をさらおうかと思っています。八十の手習い。高座でやりたいこと、まだまだいっぱいあるんです」

取材・文 長井好弘（読売新聞企画委員）



PROFILE 1929年、東京生まれ。41年、三代目三遊亭金馬に入門。45年、戦後第1号の二ツ目となり、小金馬を名乗る。テレビ番組「お笑い三人組」（56～66年）で一躍売れっ子に。58年に真打昇進、67年、四代目金馬を襲名。本格古典、意欲的な新作など、豊富な持ちネタを誇る落語界の最古参。2000年、勲四等瑞宝章。（一社）落語協会顧問。

一
柳
慧

Ichiyanagi Toshi

COMPOSER

伝えたいことを音楽に、それが情熱の源。

2014年1月、作曲60周年と80歳を記念した演奏会を成功裏に終わらせ、ますます精力的に、作曲や芸術監督など多方面の活動に取り組む一柳慧。

「音楽は情熱がないとできないですね。特に今は、優しく聴きやすいイーゼリスニング的な音楽が多い。そんな音楽ばかりが社会に蔓延すると、芸術音楽が持っている音楽本来の意味とか、音楽は時代を表し、社会と関連する、といった要素、つまり社会性を失って衰退しかねません。それをできるだけ避けたい」

今また戦後の50年代、60年代の芸術が見直されているが、あの時代のパワーと現在のものは地続きなのだろうか。

「やはりあの時代に学んだものやお会いした先輩、同じような考え方をを持った友人達の刺激は今に生きています。大戦後すぐにNYに行ったのですが、アメリカは一回も爆撃を受けず、地上戦もなかった。だから戦争が終わり一遍に解放されたアメリカは新しい芸術の創造にとって一番いい時期でした。音楽を通して、戦争への反省の上に立って次の理想や夢、何か新しいものを求めることが、とても盛んだった。それが幸運なことに、私が行った頃と重なり、刺激を受け現在までつながっています」

そのアメリカで弟子入りした偶然性の音楽

で知られるジョン・ケージや、彼から学んだ、五線譜では表現しきれない音楽をグラフィカルに描く図形譜を日本に紹介したのも一柳だった。そんな彼の今年1月に初演を迎えた交響曲第9番『ディアスポラ』のテーマは戦争だった。

「年取ると、子供時代をはっきり思い出します。12歳の時に3年8ヶ月続いた戦争が終わりましたが、内地でもいろんな苛酷なことがありましたから、子供なりに覚えていることを音楽を介して本質的にきちんと伝え残すべきだと思っています」

現在、交響曲10番を作曲中で11番も委嘱されているという。

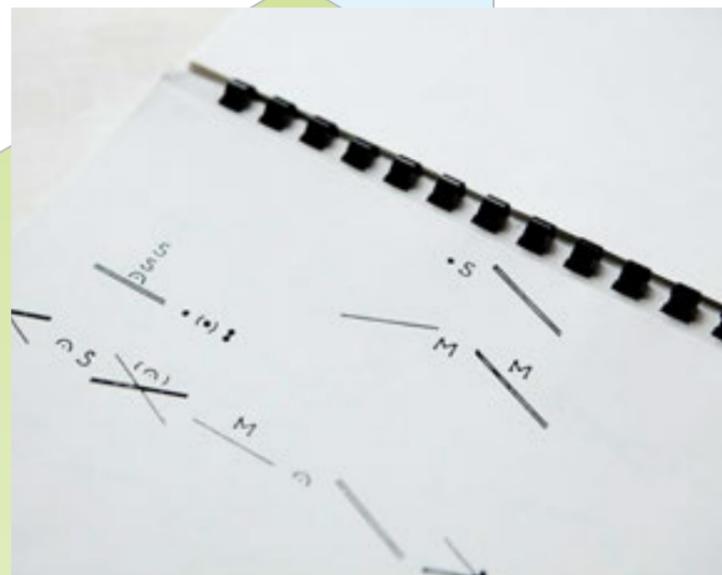
「聴いてくれた人それぞれが違う受け止め方でいい。違いを認め合いながら閉鎖的にならない音楽をと思っています」

「今では様々なメディアがあり、音楽は簡単に聴ける。しかし、それは機械から聞こえる音。そこに若い人の中でも反発し、生の音や演奏に関心を持つ人が増えてきている。だから、これからはまた面白くなるんじゃないですか」

来年は、自作のピアノ協奏曲を自ら演奏する予定も。「今からストレスだ」と語りながら、どこか楽しそうだ。「好きなことをやっているからですね」。そんな笑顔は、とても80歳には見えない。情熱たぎる青年そのものだ。

取材・文 山口眞子（音楽ライター）

PROFILE 作曲家、ピアニスト。1933年生まれ。19歳で渡米。ジュリアード音楽院でゲーセヴィツキー賞他受賞。実験音楽の作曲家ジョン・ケージの弟子に。彼の思想に影響を受け、28歳で帰国後、偶然性や図形楽譜による音楽を紹介。反復音楽や日本の伝統音楽にも影響を受け、30代後半頃から「音楽の空間性」に着目した独自の作曲思想を展開、多岐に渡る作品を発表。現在、(公財)神奈川芸術文化財団、アンサンブル「千年の響き」芸術監督。フランス文化勲章など受賞多数。



1962年にC.F.Peters Musikverlagより出版された「Sapporo」は、五線譜でなく記号で記されている。

一噌隆之
(能楽師一噌流笛方)
Issou Takayuki

能管

能楽の笛「能管」の音は、実は多くの人に耳馴染みがあります。よくテレビの効果音などで使われるピーツと甲高い笛の音、あれが能管です。ヒシギというその独特の音は空気を切り裂くように力強く、「瀧止」と呼ばれた銘管もあるほどです。

能管は、内部にノドという薄い竹筒を入れて、構造的にわざと音程を崩しています。世界的にも珍しいようで、この構造が幽玄な調べを生み出し、能の雰囲気を一層効果的に演出します。だからこそ、伝承は口伝が基本。「ヲヒャ〜 ロルラ〜」と呪文のような言葉（唱歌）を唱えながら、旋律を覚えていきます。

一本の耐用年数が300年前後。一人の笛方が一生で使う笛は、体力などに合わせて3本位替える程度。需要が限られていることもあり、玄人仕様の笛を作れる職人は全国で数少なく、技術の伝承が課題ですね。



協力:公益社団法人能楽協会

露木幸次(美術・装飾)
Tsuyuki Yukitsugu

映画「男はつらいよ」 寅さんの帽子

小道具の担当として「男はつらいよ」に関わったのは、第8作から。「寅さん」のイメージは、決まっていました。

渥美清さんは、第1作で使用した帽子をととても気に入っていましたが、とうとう穴が開いてしまい、新しい帽子を準備しました。ただ、違和感があったようで、生地を「ワントンの皮みたい」と言っていましたね。生地の厚さやツバの長さに、こだわりがあったようです。ようやく最初の帽子を作ったメーカーの職人が見つかり、何度か作ってもらいました。フェルトの生地がなくなったときは、織ってもらったこともあります。

被り方や角度にもこだわりがあったようで、鏡で確認しているところを見かけました。てっぺんの前のくぼみも、ご自身で、クセを付けていたように思います。リボンの形も、第1作から変わっていませんから、帽子への思い入れがあったのでしょうか。



所蔵:葛飾柴又寅さん記念館 ©松竹株式会社 提供

裏舞台 という名の 表舞台

多くの人たちによってつくられる舞台。
主役のまわりに視線を転じてみると、
至る所にプロの技が輝いている。
舞台を支える人に光を当てる。

STAGE 11

特効

special effects

有限会社スパーク

spark



Photo / Ko Hosokawa Text / Taisuke Shimanuki



ヒットチャート上位を彩った、人気曲・定番曲が次々と演奏され、観客の盛り上がりは最高潮を迎えている。次の瞬間、巨大な破裂音と一緒に紙吹雪と銀色のテープが頭上を舞い、会場全体が幸福な一体感に包まれる。こんな鮮烈なクライマックスをコンサートの思い出として記憶する人は多いだろう。

特殊効果、通称「特効」と呼ばれる職業は、こういったライブなどで使われる、火炎、スモーク、紙吹雪といった特殊効果（スペシャル・エフェクト）を作り出す専門職だ。1985年創業の有限会社スパークで働く畑中力さんは、そんな特効のプロフェッショナルだ。

「父親が創業した会社に勤めて、もう18年になります。現在は、ライブやTV番組、演劇、企業イベントなどを中心に活動しています」

バラエティ番組でスペシャルゲスト登場時に使われるスモークや、降りしきる雪を表現する紙吹雪、ガンエフェクトなど、特効が活躍する機会は多い。

今回の取材では、火の玉や火柱を上空に噴出する機材や、花火を実際に動かしてもらったが、たった一基でも、その熱気、華やかさに思わず「おお！」と歓声を上げてしまう迫力がある。こういった機材を数十基、時には数百基も駆使して作られる華やかな特効演出が、伝説として名を残す数多

のライブを盛り上げてきたのだ。

「自分のオペレートで会場が一斉に沸く瞬間はやはり楽しいですね。ドームやアリーナといった大規模会場の仕事も好きですが、もうちょっと規模の小さい会場で、アーティストやお客さんとの距離が近い仕事も楽しいです。感動や驚きを、肌で実感できるのがたまらない。新人のアーティストの中には、特効を初めて体験する人もいますから驚きが新鮮なんですよ。でもそこに至るまでの特効の仕事はとっても地味なんです。クライアントであるアーティストや演出家からイメージする演出を聞いて、過去の経験や、小規模な実験から、理想に近いプランを考える。現場に入れば、機材をセッティングして、微調整しながら本番に備える。ライブ中、アーティストの動きを把握しながら操作する照明や音響と違って、特効は『ここぞ!』という瞬間のインパクトを求められる仕事。裏方の中でも、特に裏方的だと思います(笑)」

畑中さんはそう笑って謙遜するが、特効の専門性は欠かすことのできないものだ。収容人数、天井高、付帯設備など、同じアーティストのツアーでも会場ごとに特徴は大きく異なる。また観客が入場すると室温が上がり、会場内の風の動きも変化する。スモークの設置位置や方向を決定するには繊細な判断が必要になる。ライブが始まれば、機材トラブルなど不測の事態も起こる。

たった1つのミスが、ライブの印象を損なうこともあるのだ。

「特効の仕事で大切なのは冷静であること。アリーナやドーム規模のライブになると、点火スイッチの操作は私がやるにしても、各機材の責任は若いスタッフたちが負うことになります。お客さんだけでなく記録用のカメラマンの動きも配慮しながら、事故が起これないようにしないといけない。緊張しすぎてもいけないけれど、特効の仕事が生死に関わることを忘れてはいけないんです」

ホール規模でのライブなどの場合、畑中さんは必ずアーティストの姿が見える舞台袖でオペレーションを行う。本番になってテンションが上がり、前もって決めておいた段取りが頭からスッ飛んでしまうアーティストも少なくないからだ。火柱を噴出すべきタイミングであっても、危険であれば絶対にスイッチは押さない。その見極めと決断は、特効スタッフだけに委ねられている。

「機材のことを一番熟知しているのは私たちですからね。ライブの興奮を途切れさせるといけないし、安全性も確保しないといけない。つまりいつも冷静に。そして柔軟さを忘れず臨機応変に、ですね」

PROFILE 畑中力(はたなか・つとむ)
1977年、東京生まれ。有限会社スパークで特効を担当。国内外アーティストのコンサート、バラエティや歌番組などのTV、演劇の特殊効果、企業イベントなど多彩なジャンルで活動している。火や煙だけでなく、水、銃器など、あらゆる特殊効果を手がける。



東京市台東区上野桜木1-5-7
電話: 03-3828-9826

緑豊かな上野公園を抜け、東京芸大近くの静かな住宅街にある桃林堂上野店は、九十一年の歴史があるという。趣きがある日本家屋。



喫茶スペースでは、小鯛焼のほか季節によって変わる生菓子を、抹茶と一緒にご楽しむことが出来る。

うすまであんがた、スリッパ上品なまでに男性にも書かれそう。



ヒバの葉が添えられて、まるで泳いでいるように見える。とても特別な演出だ。

これもおススメ!



雪肌堂の餅屋からのお菓子は、菓子系と菓物の石臼製菓など、今でも愛され続けている。

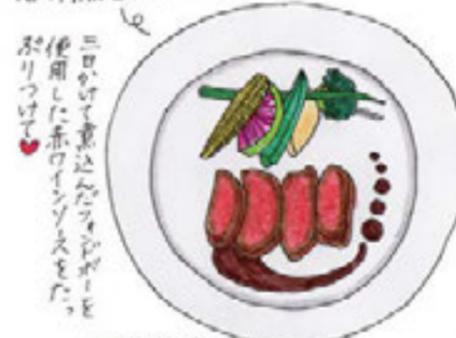


店内には、福地モトフのおもちやが、カワイイ。

そんな桃林堂の名物「小鯛焼」。手土産はもちろん、コンサートや演劇公演の差し入れに利用されている。東京芸大関係者の

来店も多く、ギャラリーのある青山本店では、卒業生の展覧会も開かれていたそう。芸術・芸能にかかわるあるお店だった。

1番人気メニュー 信州黒毛和牛のランブステーキ



ニロかけて煮込んだランブステーキを使用した赤ワインソースをたっぷりつけて



トラットリア・ブリッコラ
東京都港区新橋3-11-10
新宿311ビル B1F
電話: 03-5349-3530

新宿は、多種多様な劇場の集り外と多い。実は、エンターテインメントな街でもある。そんな新宿にあるトラットリア・ブリッコラ。舞台を終えた俳優さん、役者さん、オペラ



★中野立貝と赤い野菜のスパゲティ (からあげをのりて) フレンチ出身のシェフが作るイタリアン。日本の食材も使った、香りのよいパスタだ。



イタリアン・フランス・アメリカ・カリフォルニアなどのワインを取り扱う。本格的なワインセラーも備わっている。ワインを飲むのも楽しい。

俳優さん、役者さん、オペラ界の方が利用するのにも納得です。観劇後、友人と感想を語り、余韻に浸りながら食事を楽しむ。ゆくり、食事をした人におススメ。

「決意」を持って挑戦することで新しい可能性を見つけた、という思いを込めました。

モデルとしてデビューした頃はまだ子供で、思い出作りのつもりでした。意識が変わったのは14歳のときです。本格的に活動するようになって、スタッフと一緒に作りあげる楽しさを実感し、職業としてやっていこうと決意しました。

モデルもお芝居も、普段と別の自分になれるのが楽しいです。モデルは役を演じるわけではありませんが、服の特徴を理解し、短い時間や限られた枚数でいかに見せるかを考えて表現するので、やはり素とは違う。ある意味演技だと思います。

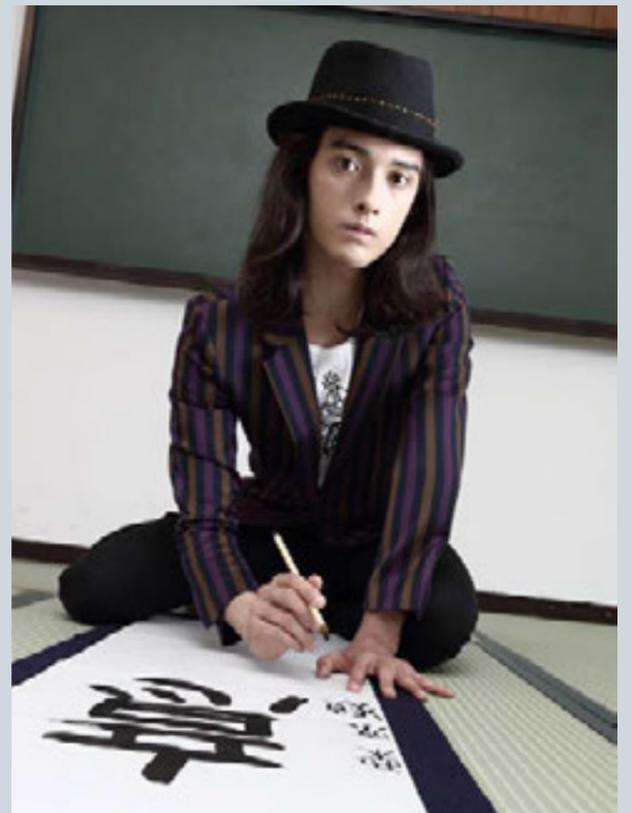
生の舞台は特に、たくさんの人と関わることで今まで知らなかった自分が目覚めていく気がします。稽古の間だけでなく、公演期間中もお客さんの反応で演技や台詞のタイミングが変わっていく。いろいろ試しながら積み重ねていけるのが面白いですね。

服のデザインや、映画や舞台の脚本・演出にも興味があります。何をしても自分の頭でよく考え、心を乱さず、ひとつひとつ良いものにしていきたいです。



ひとこと
ください
第二回
栗原類

Photo / Ko Hosokawa
Hair, Makeup / Kazuya Endo



PROFILE 1994年12月6日生まれ。ファッションモデルとしてデビュー。2014年には「ヨウジヤマモト」のショーモデルとしてパリコレクションのランウェイデビューを果たし、以降3度にわたって出演している。モデルとしてだけでなく、バラエティ番組や、映画「黒執事」「僕は友達が少ない」、舞台「GO WEST」「気づかいルーシー」など、俳優としても活躍中。



Photo / Kota Sugawara

いろんな出会いに
支えられています。

藤井ゆきよ(声優)
Fujii Yukiyo

PROFILE 専門学校を経て照明技術者に。2011年より本格的に声優として活動。主な出演作品は、劇場版アニメ「サカサマのパテマ」パテマ役、アニメ「甘城ブリリアントパーク」ラティファ・フルランザ役、アニメ「ログ・ホライズン2」でとら役、ソーシャルゲーム「アイドルマスター ミリオンライブ!」所恵美役など。

中学の演劇部に入ったところから舞台に憧れていたものの、役者になる勇気がなく照明技術の仕事に。「でも一番やりたかったことをやらないまま10年、20年って経って手が届かなくなってしまうときに、挑戦しないまま諦めるのがすごく怖くなって…、会社をやめました」

特徴的な声だったことから声優の仕事勧められた。自分が出演した作品のミュージカルショーを見に行き「子ども

たちの『がんばれ』って声援に感動して、もっともこの子たちが観てくれる作品に出たいな。アニメに出たいなと思って、声の仕事でやっていくと決めました」

遅いスタートだけど、役をやっていると自然と声色が変わる、現場で学びながら演じる楽しさを感じている。「今まで大変だと思ったことも役づくりに生きていて、これからも経験を重ね、家族で観られる作品に関わっていきたい」

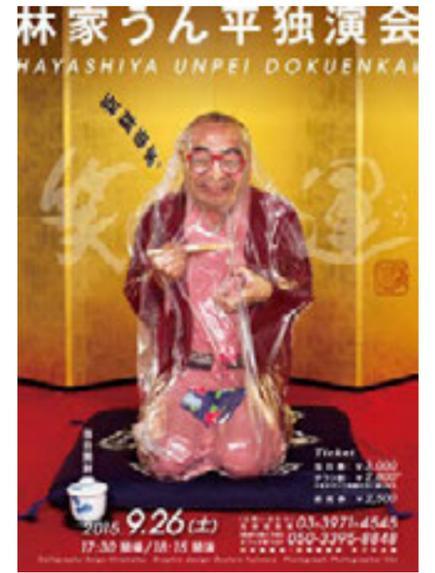
最近色々な公演のフライヤーが面白くなってきている。ここでは9月から12月に上演される、劇団・ダンス・演奏会などのフライヤーの中から、ちょっと気になるものを、本誌アートディレクターが選んでみた。



Yokohama Dance Collection
『SEPTEMBER SESSIONS』
2015年9月19日(土)・20日(日)・21日(月・祝)
横浜赤レンガ倉庫1号館3Fホール
デザイン:佐藤 寛之

世界に門戸を開いているコンテンポラリーダンス・フェスティバル「Yokohama Dance Collection」のコンペティション受賞者4名による、ダンス公演のフライヤー。4本の色面が重なり合い、その魅力を的確に伝えている。シンプルだけど、ちょっと影を付けた所など、センスの良さを感じる。

新村則人=アートディレクター。1960年生まれ。主な仕事に資生堂、無印良品、エスエス製薬、東京オリンピック招致など。JAGDA・東京ADC会員。



『林家うん平独演会』
2015年9月26日(土) / 池袋演芸場
デザイン: 藤原 龍太郎
写真: PHOTOGRAPHER HAL / 揮毫: 平松 聖悟

こんな衝撃的な落語家のフライヤーなんて、見たことない。今注目を集めているカメラマンのHALさんを起用し、うん平さんを真空パックに閉じ込めた。息ができるのだろうか?と心配したが、「新鮮な噺家」というメッセージが十分に伝わってくる。他にマジックやJAZZもあり、楽しめそうな独演会である。



毎年夏に開催される浅草サンバカーニバル。1981年に第1回が開催され、今年で34回目を迎える。約50万人が訪れる浅草サンバカーニバルでは、コンテスト形式のパレードも行われ、毎年真剣勝負が繰り広げられる。第1回から参加しているのが、地元のサンバチーム「仲見世バルバロス」だ。サンバというと、露出度の高い衣装を身につけた女性が踊るというイメージが強い。しかし、サンバでは、チーム毎のテーマを、ダンスや歌、演奏、衣装、山車の全体を通じて表現する。テーマに合わせて、山車や衣装を自分達で制作する。山車の制作には3ヶ月も要するという。楽曲もオリジナルだ。

メンバーは20代から50代までの男女と、地元浅草に限らず、関東一円から参加し、結成当時から携わっているメンバーもいる。参加したきっかけも、浅草サンバカーニバルを見て、友人に誘われてなどさまざま。 「初めて参加する人には、まずリズムに乗ること。それが楽しいと思ってもらえるよう心がけています」。リオのサンバカーニバルにも参加したことがあるトップダンサーの宮崎さんは言う。サンバのダンスには、基本のステップはあるものの、ソロのダンサーになると、アドリブがほとんどになるという。「打楽器隊に敬意と感謝の気持ちをもって踊っています。こうやって踊れるのは、素晴らしい演奏

のおかげ。ダンスを通じて、みんなの情熱を引き出したい」。打楽器がメインになるのも、サンバの特徴のひとつ。打楽器が刻むリズムに合わせ、ダンサーのテンションがあがる。ダンサーの踊りに煽られ、打楽器のリズムも躍動する。この一体感が、サンバの雰囲気を作り出している。 「先日、家に帰ると、子どもから『久しぶり』と言われました」と、会長の星野さんは笑って言う。それだけメンバーと一緒に過ごす時間も長い。仕事で地方に異動になっても、参加しているメンバーもいるという。「バルバロスは家族みたいなもの」芸術監督を務める風間さんは言う。気持ちがひとつになって作り上げる楽しさが伝わってくる。



エッセイ

東海林のり子「私はライブ大好きです」

Illustration / Asuka Kitahara

40代半ばから、60代にかけて、ワイドショーのリポーターとして、全国を駆け回っていました。「金属バット両親殺害事件」、「豊田商事会長刺殺事件」、「埼玉連続幼女誘拐事件」、「日航ジャンボ機墜落事故」など、発生した事件現場からは必ずといっていいほど、生の現場レポートがあります。事件の概要、現場の詳細な報告、近隣のインタビュー、それを短く短時間にまとめてオンエアしなければならず、極度の緊張感の中での作業。しかし不思議なことに録画取材の時よりもレポートとカメラマンの息がぴったり合い生放送の醍醐味を感じる事が出来るのです。

今現在を伝える高揚感なのかも知れません。それと同じ様な感覚を、舞台やステージの観客側にまわった時にも味わう事が出来ると知りました。仕事などで疲れた時、劇場に足を運ぶ、ライブ会場で若者と一緒に手を振りあげる、やがてパワーが満ちてくるのを感じるのです。演じる俳優さん達のエネルギーや、楽しませてあげようとす

るミュージシャンの熱さが伝わってくるのです。今を共有出来ているという喜びなのかも知れません。「舞台は一生もの」という言葉通りなのでしょう。

20年程前、「午後の遺言状」という撮影現場で、あの女優、杉村春子さんにお話をうかがった事があります。『女の一生』も間もなく1000回をむかえるけれど、毎回芝居が同じなんて事は絶対あり得ないの。1回づつ違う。お客様も毎回違えば、反応も違う。その日の役者さんの状態もさまざま。だからあきらめず続けることが出来るのよ。今日はどんな風に演じようかと考えるとワクワクするのよ!!と。舞台は生き物なんだ、そしてそれが舞台の魅力なんだと納得しました。また素敵な芝居を見つけて行ってみましょう。そして、明日はロックフェス。元気をもらってきます。

1934年さいたま市生まれ。立教大学卒業後、ニッポン放送に入社。13年間のアナウンサー生活のち、フリーとなり、「3時のあなた」、「おはよう! ナイスデイ」のリポーター。ロックバンド「X」のレポートで若者の支持を得る。現在はテレビ、携帯サイト、講演活動を行っている。

NEWS

チラシアプリ『チラシステージ』

全国の舞台公演のチラシを集めた無料アプリが登場!ジャンル、地域、公演日での絞り込みやキャストなどキーワードで検索できます。公演スケジュールや会場アクセスもワンタップで見やすく、ブックマーク機能も。(株式会社イープラス) <http://eplus.jp/cst>



気軽に当日券『Tickets Today』

舞台公演の当日～数日前のチケットを買える『Tickets Today』が、渋谷(109・2階)と銀座(銀座ファイブ・1階)にオープン。対面販売なので、外国人観光客やインターネットが苦手な方も、店頭で公演情報を確認して買うことができます。(ロングランプランニング株式会社/店舗営業時間 10:00-20:00) <http://ticketstoday.jp>



PRESENT



上野鈴木演芸場 9月下席 昼の部 寄席鑑賞券 ペア2組

三遊亭金馬師匠が登場する9月21日～30日の寄席鑑賞券。いろんな噺家さんの落語のほか、漫才や紙切り(色物)も楽しめるのは寄席ならではの。



加藤武追悼公演『すててこてこてこ』 鑑賞券 2名様

老舗劇団文学座が可見市文化創造センターとタッグを組み、多彩な出演者を迎えて臨む巡回公演。吉祥寺シアターでの10月13日(火)、15日(木)19:00の公演を各1名様に。

[プレゼント応募方法] SANZUIウェブサイト (<http://www.cpra.jp/sanzui>) からご応募いただくか、はがきに①ご希望のプレゼント②氏名③年齢④性別⑤住所⑥電話番号またはメールアドレス⑦SANZUI入手場所⑧誌面の感想を書いて「〒163-1466 新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー11階 芸団協広報課」までお送りください。【締切】9/15(火) 10/6(火)(必着)
*当選の発表は、プレゼントの発送をもって代えさせていただきます。



編集後記

SANZUIがスタートして3年目、編集に携わる中でいろんな出来事があります。本紙の取材後に、加藤武さんの訃報を受けました。お話をうかがって、秋の公演が楽しみだっただけに、とても残念なお知らせでしたが、関係者のご理解もあって故人の舞台への思いを収めることができ、感謝しています。取材は、インタビューと写真撮影の二本柱。今回は主に芸能花伝舎で行いました。建物の改修で壁だったところがガラス張りになり、自然光での撮影も可能になったので、背景を立てるボールとロール紙を用意して。プロの手にかかれれば、ちょっとした空間も「どこで撮影したの?」と驚くばかりです。SANZUIをアートとして楽しんでいる読者の方も多いかと思いますが、実演芸術の魅力を伝える素敵な紙面がつけられるよう、これからも精一杯サポートしていきます。(大)

【お詫びと訂正】前号「SANZUI vol.07_2015 spring」の本文中に誤りがありました。正しくは以下の通りです。

19ページ 「ひとことください」クレジット(正)Text / Taisuke Shimanuki
読者および関係者のみなさまにご迷惑をお掛けしましたこととお詫びするとともに、ここに訂正いたします。※ウェブサイトには修正版を掲載しております。

WEBサイト: <http://www.cpra.jp/sanzui>
Facebook: <https://www.facebook.com/sanzui.news>
Twitter: @SANZUI_info

発行:公益社団法人 日本芸能実演家団体協議会
実演家著作権センター(芸団協CPRA)
発行日:2015年9月1日
発行人・編集人:松武秀樹(芸団協常務理事・芸団協CPRA法制広報委員会副委員長)
編集顧問:大笹吉雄(演劇評論家)
編集:芸団協CPRA法制広報委員会SANZUI編集プロジェクトチーム
上野博(音制連)、丸山ひでみ(PRE)、鈴木明文(音事協)、井上滋、君塚陽介、大井優子、小泉美樹(芸団協CPRA)
アートディレクター:新村剛人
デザイナー:庭野広祐(新村デザイン事務所)
コピーライター:二藤正和
協力:芸能花伝舎、ブルーノート東京

芸団協・実演家著作権センター(CPRA)とは
CPRAは実演家の権利処理業務を適正に行うための専門機関として、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会(芸団協)と関係団体の協力により1993年に発足しました。レコードやCDを放送で使ったり、レンタルしたりするとき等の権利処理と使用料等の徴収を行い、委任権利者に分配しています。それに留まらず、広く実演芸術の円滑な流通と権利の擁護を目的として幅広い活動を展開しています。 <http://www.cpra.jp>

PICK UP

「美匠熟考」取材こぼれ話

今回ご紹介した寅さんの帽子は「葛飾柴又寅さん記念館」で見ることができます。「くるまや」のセットが移設された館内は、今にも寅さんが現れそう。帽子のほかにも、裏に刺繍の入った上着や、鼻緒が蛇皮でできた雪駄など、実際に使われた衣裳や小道具がたくさん展示されています。帝釈天もすぐ近くなので、「男はつらいよ」の世界を堪能してみたい? (葛飾柴又寅さん記念館/開館時間 9:00-17:00、休館日 毎月第3火曜日及び12月第3火・水・木曜、京成柴又駅より徒歩8分)



エピソード募集!

『SANZUI』は創刊より3年目を迎え、これまで、多様なジャンルの実演芸術を取り上げてきました。『SANZUI』をご覧になってのエピソード、これまで知らなかったジャンルの公演に足を運ぶようになった、もっと知りたいと思ったなどなど、ぜひお寄せください。『SANZUI』紙面やウェブサイト等でご紹介させていただいた方には、SANZUIオリジナルグッズをプレゼント。SANZUIウェブサイト (<http://www.cpra.jp/sanzui>) より、たくさんのお便りをお待ちしています!

渡辺貞夫

Watanabe Sadao

Text / Kazune Hayata Photo / Ko Hosokawa

終戦後、明るい音楽が流れ夢中で聴いた。
2年間だけのつもりが、
東京で音楽をやっていくと決めた。



飛び切りの笑顔とエネルギーに満ち溢れた人だ。世界中で展開されている躍動的な音楽は、その優しい笑顔と共に聴く者をいつも喜びで満たしてくる。近年では、そうした精力的な演奏活動に加えて、次世代の育成にも積極的に取り組んでいる。82歳になった今も第一線で活躍し続けるアルト・サクソ奏者、渡辺貞夫。その音楽にかける思いとパワーはどこから来るのだろうか。

宇都宮の小さな楽器屋に
1本だけポツンと置いてあった
中古のクラリネット

——どのようにしてジャズに出会われたのでしょうか？

僕は13歳の時に終戦を迎えましたが、それまで日本に流れていたのは流行歌、唱歌、軍歌のようなものばかり。華やかな音楽はまったくありませんでした。戦争が終わると同時にアメリカのポピュラー音楽、ハワイアン、ラテン、ジャズのような明るい音楽が流れるようになって、それらを夢中になって聴き始めました。そんな時にビング・クロスビーが主演する「ブルースの誕生」という映画に出会ったんです。その中に10歳くらいの少年がカッコいいクラリネット・ソロを演奏する印象的なシーンがありましたね。その少年に憧れたのがきっかけです。

——すぐに演奏されるようになったのでしょうか？

15歳の時に宇都宮の小さな楽器屋に1本だけポツンと置いてある中古のクラリネットにたまたま出会いました。それが3000円という値段だったので、これなら買ってもらえるかもしれないと思って親父にしつこくねだりました。ポディがドイツで、ベルがアメリカ、樽とマウスピースが日本製という継ぎはぎだらけのひどいクラリネットでした。昔、無声映画のバックでクラリネットを吹いていたという近所の駄菓子屋の親父さんに1回10円ずつ

払って店先で3日間教えてもらいました。それが始まりです。その数か月後には宇都宮のダンスホールなどで演奏し始めていました。

——それはまだ早いふん早いスタートで、そうですね。当時は、楽器を持っていけば仕事もらえるような時代でしたから。そうこうするうちに鬼怒川のホテルで進駐軍向けに演奏する仕事が入りました。ところが当時、米軍が関係する場所で演奏するには特別調達庁というところが発行するライセンスを持っていないと駄目だったんです。よってスペシャルAからDまでランクが決められるんですが、僕達のバンドは最初、下手過ぎてランクが付けられないと言われましてね(笑)。もうすでに仕事が入っているからと言って頼み込んだら、特別にDの下のEクラスというライセンスをもらいました。高校を卒業した2週間後には上京してアルト・サクソも吹いていました。親父には2年間くれと。2年間だけ東京で好きなことをやらせてくれ。そうしたら帰って来て親父のやっている電気屋を継ぐからって。

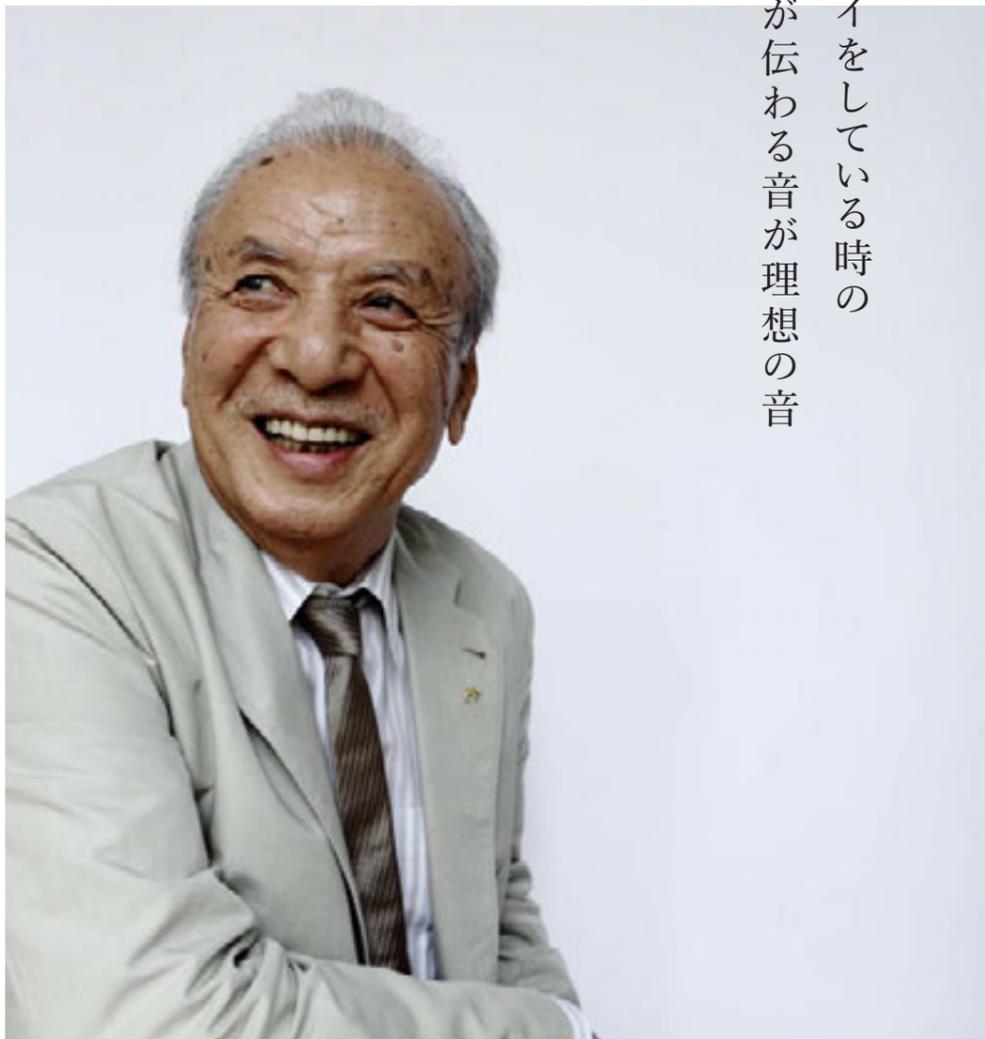
——それが2年では済まなくなりましたね。

2年のはずがこんなに長くなっちゃいました(笑)。19歳の時に先輩のピアニストである穂吉敏子さんに声を掛けていただき、ミュージシャンでやっていくという決心を固めました。僕は正式な音楽教育は受けていませんでしたから、ミュージシャンとして生きていくのかどうか自信を持つことができなかったんです。その僕に、穂吉さんが新しいバンドを作るので入らないかと声を掛けてくれました。本当に飛び上がるほど嬉しかったです。当時、最も前衛的な音楽であるビバップ・スタイルのジャズをしっかりと演奏していたのは守安祥太郎さんと穂吉さんのふたりだけでしたから。その穂吉さんに認めてもらえたということで、これなら



プレイをしている時の

思いが伝わる音が理想の音



音楽でやっていけるんじゃないかと。

世界の子供たちが音楽で
交流できる場を作りたい

——その後、アメリカのバークリー音楽院へ留学され、帰国後はジャズだけでなく、ブラジル音楽やアフリカ音楽なども取り入れたワン・アンド・オンの音楽を築き上げられました。

初めてボサノヴァに出会ったのは、バークリー留学中にゲイリー・マクファーランドというヴィブラフォン奏者のツアーに参加した時です。最初にボサノヴァを演奏した時は、何だかゆるい音楽だなという印象だったんですね。でもその音楽を聴き、演奏するうちに次第に魅かれていきました。この音楽には人の心を癒す独特の歌の世界があるんですよ。アフリカへ初めて行ったのは1972年。テレビのレポーターとしてケニヤに出掛けました。アフリカはジャズの故郷だと聞いていたので、ずっと憧れていました。だからテレビ局から声を掛けられた時は飛びつくようにOKしました。ナイロビの空港から外に出た瞬間からアフリカの風土と人々の魅力に心を奪われました。どこにいても、シンプルで生きた音が聞こえてくる土地。仕事しながらでも歌があるし、学校の行き帰りにも歌がある。とても新鮮でした。ある日、移動中にサバンナで車を止めて一服していたんですが、その時、最初何の音もしなかったその場所に風が吹いてきて、鳥の音が遠くから聞こえてきて、久しぶりに自然を、そして風を感じました。それまで出会うことのなかったダイナミックな自然、そしてオープンな人々。音楽を求めていっばいになっていた気持ちが楽になって、すっかりアフリカにはまってしまいました。

——そうして世界を回られた渡辺さんは、子供たちへの指導も熱心になさっていますね。

1970年代後半にブラジルを1か

月旅したのがきっかけです。バイヤ州

のサルバドルでオロドゥンという素晴らしいサンバチームに出会ったんです。

シンブルだけでもすごくダイナミックなリズム。こういう音楽を日本の子供たちに体験させたいと長い間思っていたところ、NHKなどの協力もあって1995年に栃木県で開催される国民文化祭で行うことになりました。栃木県に毎週出掛けて子供たちと練習して1年かけて準備しました。そうして行った演奏の評判が非常によくて、1回で終わらせるのは勿体ないということになり、今年で20年になります。いまだに続いています。2005年の愛知万博では、僕が前から抱いていた、世界の子供たちが音楽で交流できる場が作れたらいいなという思いを、五大大陸の各国から集まった400人の子供たちの手で実現させることができました。お陰さまでこれも非常に評判がよく、あちこちの国から声を掛けていただけるようになりました。

僕の追い求める音に
また一歩近づけた

——長年、音楽と深く関わっていらっしやる渡辺さんにとつての理想の音とはどのようなものでしょうか？

自分の思いが伝えられる音ですね。理想の音って人それぞれだと思うんですが、僕にとつては自分がプレイをしている時の思いが伝わる音が理想の音です。だから必ずしも綺麗な音を求めているというわけでもないんです。僕のテイストの音を求めているわけです。僕は十数年前から現在のセルマー・スターリングシルヴァーという楽器を使っています、この楽器を演奏しながらその音を掴もうとしています。先週ブラジルでニューアルバムを録音してきましたんですが、僕の追い求める音にまた一歩近づけたように思います。

——そのセルマー・スターリングシルヴァーですが、吹きこなすのが大変な

楽器と伺っていますが。

しんどい楽器ですよ。僕は1960年代後半から、手ごたえのある楽器ばかりを使ってきましたけれど、その中でも一番しんどい楽器です。手ごたえがちょっとあり過ぎるほどなんです。手ごたえがない楽器はつまらないですからね。でもその分、柔らかくふくよかな音を遠くまで運ぶことのできる楽器です。僕にとつては音が命ですから、毎回しんどいなと思いつつも付

き合っています。しょうがないですね。惚れた弱みです(笑)。以前の楽器に戻そうか、そうしたらずいぶん楽になるだろうなって思うこともあるんですが、それでもいざ仕事になるとこの楽器を選んじやう。

——渡辺さんは今でも精力的にライブやツアーを行っていらつしやいます。ご苦労などはありませんか。

いやあ、ちつとも大変じゃないですよ。行きたくて行くわけですから(笑)。プレイを続けていくためには常に自分のコンディションをキープしてないといけません。しばらく楽器に触れていないと不安になりますし、調子が出るまでに時間もかかります。毎月スケジュールが入っていると、ライブという真剣勝負の中で楽器に触れていることができずからね。ありがたいことです。ですからお正月以外はほぼ毎月ツアーに出ていますし、必ず何かやっています。現在は、10月にニューアルバムがリリースされるので、その準備をしているところ。その他にも、毎年やっているクラブ・イベントやクリスマス・コンサートなどの企画を進めています。もう再来年の分まで考えていますよ。僕はせっかちなもので(笑)。楽しみにしててください。

PROFILE 1933年東京都生まれ。18歳で上京と同時にプロ活動開始。1962年に米国バークリー音楽院に留学。1965年の帰国以来、長年にわたって日本のジャズ界をリード。70枚を超すアルバムを発表。近年では、栃木県の中学生への音楽教育活動や、世界各国の子供たちの音楽交流を実現させた愛知万博・政府出展事業の総合監督など、次世代の育成にも熱心に取り組んでいる。1995年に紫綬褒章、2005年に旭日小綬章を受章。



ロングインタビュー

渡辺貞夫